

変革者

～カンブリア宮殿～

村上龍 著 テレビ東京報道局 編

(まえがき)

本書に収録されているゲストの共通点は「短期の金銭的利益」をほぼ度外視していること、そして経済の活性化に寄与している。

パラダイムの変化を読み取り正確に対応することで、つまり変化を作り出すことで、社会からその価値を認められ日本経済に多大な貢献をしている変革者である。

変革者は「規制と既成を突破する」ことを優先させる、更に「伝える」は「伝わりようがない」という困難な地点からスタートを優先する、そして何より「社会的ニーズを優先する」変革者は徹底して実現を目指す。(紹介順等任意とさせて頂きました)

{ 在宅医療で超高齢化社会を支える }

マッキンゼーで経営を学び医師に必要なマネジメント力は「治療や組織の目指す先を伝え、人々を動かすということ」

武藤真祐 (祐ホームクリニック理事長・医師、1971年生まれ、東大医学部卒)

2030年高齢者の比率は現在の24%から30%超となり病院不足で50万人が死に場所を失うと云われている、男性の3人に一人・女性の4人に一人が生涯未婚で老後に身寄りがなくなる懸念もあり深刻な事態だ、武藤医師は在宅医療でその問題に立ち向かおうとしている。

2014年2月の時点で450人の患者を医師30人更に看護師やアシスタント・事務職が22人で24時間365日対応、訪問診療の移動車は「動く病院で機器を満載」朝会では「経営学の巨人」ドラッカーの本を、声を出して唱和、成果としては現場を改善

- ① 時間は患者のもの、と事務作業は徹底して効率化「電子カルテの口述筆記」
- ② 情報は全て共有～在宅医療にマネジメントと IT を持ち込み独自のクリニックを作り上げた。

東大医学部で学び天皇皇后両陛下の侍医まで務めた。

ある時、街の診療所の往診に出た時、ゴミの山で一人暮らしする寝たきりの高齢者に強い衝撃を受け「もっと社会の根本を変える仕事をしなければ」と思った。

その後マッキンゼーに転職、製薬・企業等のコンサルティングを経験、経営や社会の課題解決の手法を実践から学んだ。

2010年東京都文京区にクリニックを設立、在宅医療の世界に乗り出した、13年迄の3年間で150人もの患者を自宅で看取った。

東日本大震災の傷跡が残る2ヶ月後に視察してその悲惨に衝撃を受け、 P 1

2011年に開所、3人の医師と10人のスタッフで宮城県石巻市でも在宅医療を始め週のうち半分はこの地で過ごし170人の患者を往診している。

富士通と共同で作上げたチームケアの仕組みで他の地域より一步進んだ連携が可能となった、医師が訪問前に共有情報をタブレットで確認してより丁寧な介護をすることが可能となった、医療・介護・生活情報に共通のサービスプラットフォームを作ることにより世界で「一番早く進む高齢化に対応しよう」としている。

どのアンケートを見ても高齢者の多くは、最後は自宅で亡くなりたいと希望、高齢者も支えられる側というより如何に支える側に居続けていただけるか、やり甲斐・生きがいを持っていただけるかが一つの大きなカギになる、又今まで培ってきた知識やスキルを社会貢献に使いたいと思う高齢者の方は沢山おられると思うので、そういう方々が活躍できる世界を作っていくことが重要なことではないでしょうか・・・

{ 運営経験なく、資金ゼロから新しい学校を築いた }

2014年夏に軽井沢は大きな興奮に包まれた～元ユニセフ職員 小林りん(インターナショナルオブスクール・オブアジア軽井沢代表理事)メディアも多数駆けつけ、通称 ISAKA 一期生の生徒・日本人18人含むアジアを中心とした世界15ヶ国49人、できたばかりの全寮制・返済義務のない奨学金制度、この学校の最大の特徴は世の中を変えていけるリーダーの養成を目標に掲げたこと。

この学校を作った小林さんは東大経済学部卒、外資系証券会社等を経て32歳でユニセフ職員～赴任先はフィリピン、ここでの体験は一日二ドル以下で暮らす貧困層が半数近く、そんな子供達の教育支援から地元で NPO を開き青空教室、そんな子供達のお目当ては最後に配られる弁当だ。

小林は「変革を起こすリーダーを育てる学校を作ろう」と心に決めた、今から6年前にユニセフを辞め学校づくりに動き出した、当初はスポンサーが付き20億円が寄付される予定だったが、リーマンショックでまさかの資金ゼロ、それでもあきらめず2500人に頭を下げたが結果は出ず、長男が生まれてぎりぎりの生活にもめげず、2010年には2週間という短いサマースクールを開催、34人が参加～生徒にも招いた教師にも感動を与えた、その試みをメディアも報道し、これを機に資金も集まりだした、毎年サマースクールを行うたびに支援者は増え結局4年間で14億円・軽井沢の7500坪の土地も、理念に賛同した企業が格安で貸してくれた、教師陣も学校の理念に賛同して～海外の名門で活躍した精鋭で待遇の良かった職を捨て家族と共に軽井沢に移住。

高校全寮制にした理由～自分はどう生きたいか・何をしたいのかを考えてこの教授の下で学びたいという位の意識で大学を選ぶべき、15～6歳位迄は母国語で本を読んだり自分の国の文化に触れて、ある程度アイデンティティが固まってお互いにぶつかり合いがあるようなコミュニティこそ多様性は学べるような気がする、私たちが定義するリーダーはイコール変革する人、

どんな分野・どんな立場でも新しい価値観を世の中に発信していくこと。

サマースクールの実施で風向きが変わったのは高校時代友人の企業家が「ベンチャー業界ではアーリー スモール・サクセス」初期段階で何かをやった方がいい、とのアドバイスからひらめいたのがサマースクールだった。

何故、先生から生徒が世界中から集ってくれるのか・・・

それは小さな規模のサマースクールを実施してから急に風向きが変わった！

{ ご当地グルメブームを起こした・まちおこし仕掛人 }

焼きそばの店が150件以上もある静岡県富士宮市は地元のご当地グルメ焼きそばで「まちおこしに成功した」奇跡の地、仕掛け人は渡邊英彦氏で富士宮焼きそば会の会長でもある、食材や店の売り上げ観光客等の経済効果の総額はこの12年で、なんと664億円で、富士宮はかつて製糸業で栄えた地、多くの労働者は安くてボリュームのある焼きそばを好み、おらが街の味となった、しかし時は流れシャッター通りが目立つ、さびれた地方都市に。

東京からUターンした渡邊氏は焼きそばで町おこしをしようと考え「富士宮焼きそば学会」を結成、2000年「焼きそばG麺」と称して夜な夜な街に繰り出し、それぞれの店の特徴や間取りなど丹念に調査「富士見焼きそばマップ」を作成、住所や営業時間・価格・味の特徴・コメントも付け加えた、それを面白がったテレビ局や報道が殺到して、その数は1年間で175件にもなった。

次なる仕掛けは「焼きうどん発祥の地」と云われる九州小倉との対決イベントをぶち上げ、名付けて「天下分け麺の戦い」行政も巻き込んで静岡県知事に巨大な必勝祈願を書いてもらった、マスコミもニュース番組で大々的に報じた。

ツアー会社に掛け合いバスツアーも誘致に成功、今では年間100以上もツアーが組まれている、あの手この手でこの焼きそば目当ての観光客はなんと年間40万人以上と2000年に比べ4倍となった。

更に日本各地の安くてうまい庶民の味が一ヶ所で楽しめる、人気のご当地グルメの祭典「B-1グランプリ」を生み出し2006年参加10団体来場者1、7万人が始まりで、7回目の2012年には全国63団体の参加、来場者は63万人と押しも押されぬ、国民的イベントとなった、生みの親の渡邊氏は「B-1活動は、まちおこし活動のお披露目の場であり町のPRが最優先、料理はそのきっかけに過ぎない」と「大風呂敷を広げておくと結果的に本当にそうなる」

{ 人を救う建物で世界を変える建築家 }

坂(ぼん) 茂 1957年生まれ 建築家、京都造形芸術大学教授
仮設かパーマネントかというのはその建物が愛されるかどうかで決まってくる、代表作はフランスの国立美術館(総工費60億円)この建物で

フランス芸術文化勲章を受章した。

ドイツのハノーバー万博ではパピリオンを設計、再生紙の「紙管」を使った斬新な構造で世界的な権威のある二つの賞を受賞、ニュージーランドの教会は東日本大震災の前にマグネチュード6、3の大地震、日本人28人を含む犠牲者185人、町は廃墟と化した、壊れた大聖堂の修復には70億円かかり再建の目途は立たないが「紙の教会」なら4億円程度ですむ、世界的にも珍しい屋根に使われた丸い筒は紙で出来た紙管。

その後、坂氏は世界で災害が起きる度に呼ばれなくても、自ら駆けつけ建築による支援を行っている。

中国の四川大地震では復旧の遅れていた小学校を「紙管」を使って再建。ハイチ大地震では紙管シェルターを建設、東日本大震災では紙管で作った間仕切りを非難所に持ち込み材料費も格安でプライバシーのない生活に大きなストレスを感じていた人達がこの間仕切りを歓迎し最終的には50以上の避難所で1800ユニット以上使われた。

坂氏の拠点は今田谷区でニューヨークとパリの3ヶ国でスタッフが45人、東京だけで20件以上の仕事が同時進行。

紙管の開発着手は1986年、建築資材として1993年国に認められ、ダイワハウスの子会社大和リースとタッグを組み災害に備えて新しい住宅システムを作った。36平方メートル・キッチン・シャワーの一体ワンルーム等もありミソは国内でなく海外で大量生産している、普段はその国で低価格住宅として販売、ひとたび災害が起きれば仮設住宅として運び込む、東日本大震災では約1万戸供給。

人に何かをしてあげているという気持ちを持つべきではなく、実際自分のためにしているのだと考えないと、これは続かない。

{ 新時代の金融のあり方を構築する }

ミュージック・セキュリティーズ代表取締役 小松真実 1975年生まれ、尊敬する人や企業を応援するために自分の資産を使う、それが大きな投資になっていく。

音楽、地域地場産業、Jリーグチーム、アプリ開発、太陽光発電、伝統産業など200社317本ファンドを組成、2013年世界経済フォーラムより young global leaders に選出

今治市の農薬を使わないオーガニックコットン100%のタオル、このタンザニア産の原料購入資金2330万円は小口ファンドで賄った、171人がこの会社に投資。

津波で流された岩手県陸前高田市の八木澤商店創業200年という醤油の老舗醸造元は、このファンドで一関市に新たな工場を建設、1627人で5千万円集まった。

基本的仕組みは資金を集めたい事業者を見つけファンドを立ち上げ個人から投資を募る、手数料は5、5% 事業の売り上げが伸びればその配当を投資家に還元。

ホームページでは投資を募集しているファンドが常に数十本掲載され一口当たり千円から5万円程度。

創業130年姫路市の下村酒造の代表ブランド奥播磨はお爛をするとおいしいと評判の酒、造る酒は全て純米酒で醸造に3年かかる、6回にわたりファンドを募集延べ1041人、投資総額6560万円、1回目は利回り7%超え、特典としては年1回送られてくる奥播磨を楽しみにしている投資家も多い。

ユニークなファンドとしては栃木県大田原市の「大田原ツーリズム」市が出資して作った旅行会社、市内にはこれといった観光名所がない為、地元の農家を巻き込んだツアー提案、地元の収穫体験グルメでおもてなし、投資家限定ツアー「地元牧場の牛を使った大人気のしゃぶしゃぶ食べ放題」運営資金の為ファンドを組み投資家募集。

{ 地元商店街の常識を打ち破り続ける } コミュニティの力で町は再生できる！

コミュニティリーダー 古川 康造 1957年生れ 高松丸亀町商店街振興組合理事長
この商店街は全長470m 大きく7つのブロックに分かれている、顔の一番街には高級ブランド・食・美と健康等のテーマに沿った店が200入っている、年間で1万人以上の人々が視察に訪れる、元々400年以上の歴史がある商店街、ピーク時は一日3、5万人以上の客でにぎわっていたが1988年瀬戸大橋の開通で大型店が郊外に続々進出、売り上げはピーク時の三分の一、人出も7割減少。

奇跡の復活キーマンは商店街理事長の古川氏、再開発担当役員の明石照夫氏、そして前理事長の鹿庭幸男氏で、全ては鹿庭の先を読んだ鋭い一言から始まった！バブル景気絶頂の最中に「いずれ高松丸亀商店街はダメになる、すでに駄目になった他の商店街を今すぐその目で見てください」と～後継者の古川は直ぐに動いた、その結果、読み通り大型店にゴッソリ客を奪われ鮮魚店・青果店・病院・銭湯などが次々に消えていった、1000人いた住民はたった75人、しかも残ったのは高齢者ばかり。

話し合いを続けた結果はウルトラCのアイデア「定期借地権」を利用した再開発、地権者27人全員の合意を目指し、難航したものの2006年全員の合意で商店街は生まれ変わり、売り上げは以前の2倍・人出は3倍となった。

高松駅と商店街迄の1、2kmを結ぶバスも商店街の運営で乗車賃百円～年4百万円の赤字も商店街が運営する駐車場で年間2億円もの利益を生み出している。

手を尽くした結果、75人の住民は2014年3月には500人に復活した、誰か一人でもこの計画に了承しないとこの計画はやらないと、要は街と一蓮托生「正しい村八分」と呼んで仕組みを作り上げたのが功を奏した、計画づくりには16年かけた、街づくりとか商店街再生の話も、要は自分達が80歳になっても、あの街で生活するときに必要なものは何かと考えると全部答えは出てきた。

{ 中小企業を守る仲介の先駆者 }

企業の尊厳を守ることがM&Aの成功を生む！

三宅 宅 1952年生れ 日本M&Aセンター社長(1991年設立)

2007年東証第一部上場、2011年M&A支援実績約100組14年は年150組ペース。

茨城県常陸大宮市、地元で評判のレストランチェーン「和風レストランばんどろ太郎」
2011年春、和菓子の販売コーナーは栃木県の有名菓子店「雅洞」の商品は事業も職人も含めて企業買収、その仕掛人が日本M&Aセンターだった、同センターには売り手や買い手から直接情報が入ってくるが、更に全国の地銀等254の地域金融機関と327の会計事務所との情報ネットワークもある(2014年9月現在合わせて861)

中小企業が生き残るための友好的なM&Aは2011年度だけでも106組成功、その後も増え続け過去20年で900組、帝国データバンクの発表では中小企業は66%の会社に後継者がいない。

製造業は先行き不安で下請け苦戦、悲惨な例ではドラッグストアで大手が進出して地元の店はほとんどゼロに、薬品卸の会社は以前400社、今では数社、地元の問屋配送業者、内装業者、建築業者等ほとんど全部が厳しい環境で生き残っていけない。

{ 幾多の危機を乗り越え奇跡を起こした、小惑星探査機「はやぶさ」 }

川口淳一郎 1955年生れ 宇宙航空研究開発機構シニアフェロー

2003年5月9日「はやぶさ」は宇宙へと旅立った、目的地は小惑星「イトカワ」
～500m程の小さな惑星～地球から約3億キロ離れ地表のサンプルを撮取して往復し4年後に帰還予定、独自に開発されたイオンエンジン、開発はプロジェクトチーム國中均教授、今までの化学エンジンに比べ燃料が十分の一「はやぶさ」にはこのエンジンが4基、燃料はわずか66kg、プロジェクトの主要メンバー50人、リーダーが川口淳一郎氏

2005年9月13日「はやぶさ」は2年4ヶ月後に小惑星イトカワに到着、しかし異変が起これば不時着後30分以上も降下の信号～実は地表に横たわっていた、再度の着陸でサンプルを確実に持ち帰るリスクを冒したが再着陸に成功～サンプルの採取、打ち上げから2371日目に予定より2年以上遅れ満身創痕となりながら地球に向かっていたがまたもや大きなトラブル、イオンエンジン3基故障、最後の1基もストップ、絶体絶命のピンチを救ったのが國中教授はじめ開発チーム、2010年6月13日帰還カプセルを切り離し「はやぶさ」に地球の写真を見せたいと写真を送信している途中、高温で燃え尽きカプセルはオーストラリアの砂漠で無事回収、カプセルから1500個の微粒子が発見された、川口先生は2010年、宝島社刊「はやぶさ・そうまでして君は」という本の中で、本当にいい子だったと思うと、人類初に挑み続けた7年間を支えたもの・そして我々に協力してまるで人間のように健気さを感じ、パートナーという感じがしていたとも。

以上